

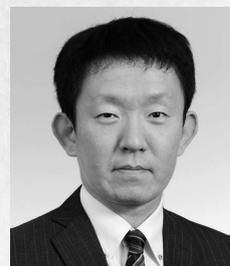
化学教育 徒然草

国際バカロレアコースの 授業を担当して思うこと

KOZASA Tetsuo

小笹 哲夫

若溪学園中学校高等学校 教諭
化学と教育誌編集委員会 副委員長/関東支部化学教育協議会 委員
化学グランプリ・オリンピック委員会 委員



巻頭言

私の勤務校では、国際バカロレア（IB）の教育プログラムのうち、一部の教科を日本語で学習する日本語デュアルランゲージ・ディプロマプログラム（日本語 DLDP、高校2・3年生対象）を履修できるコースを設置している。その中で私は化学の授業を担当し、昨年春にその第1期生が卒業した。その生徒たちと過ごして感じたことについて、いくつか挙げてみる。

まず、IBコースの生徒たちは学力面での成長に加え、チャレンジする力がついたと思う。日本語 DLDP コースを設置している学校が少ないため、学習の進め方や最終試験の情報などあらゆる面で情報が少なく未知なことが多かった。そのため、生徒間で積極的に情報を共有し、どんな場面でも協力して困難を乗り越えようとする姿が見受けられた。未知なことだから協力し合い、未知なことに出会っても失敗を恐れない姿勢が、生徒たちには身についたように思う。

さらに、IBコースの授業を担当して感じたうちの一つは、私自身の教員としての成長である。IBの学習内容には大学教養レベルの内容が含まれる。これまで高校の授業で扱ったことがない内容（例えば、 S_N1 反応や S_N2 反応、NMRなど）の授業準備は大変であったが、久しぶりに大学の教科書を見返したりして、これまで曖昧だった知識を深めることができた。また、IBコースは少人数クラスだったため、これまで大人数では行うのが難しかったことをいろいろと試すことができた。実験器具の数や試薬の量もたくさんある必要はなく、比較的すぐに用意できる。ある日、化学の実験中に「前からこれをやってみたかったんだよ。」とボソッと独り言を言ったところ、「〇〇先生（生物担当）も同じことを言ってましたよ！」と生徒に言われたのが印象的だった。どの先生にとっても新しい試みをするのによい機会だったようである。機器分析を学習した際には、授業時間内に車1台で大学の研究室に行き、実際にNMR装置を用いた測定の様子を見せてもらうこともでき、生徒にとっては良い経験になっただろう。

第1期生と過ごした2年間があっという間に終わり、今年度は第3期生の授業を担当している。これまでの取り組みを改善するとともに、その内容を日本の高校化学に波及させることが今後の私にとっての課題である。

[連絡先]

305-8502 茨城県つくば市稲荷前1-1（勤務先）